

青森県栽培漁業振興協会、八学大など共同研究

フジツボ 種苗生産に成功

全国初

青森県栽培漁業振興協会（階上町、松下誠四郎代表理事）は31日、八戸学院大などと共同で研究に取り組んでいるミネフジツボの生産技術の開発で、全国で初めて実用レベルの種苗生産に成功したと発表した。植物プランクトンの一種であるタラシオシラを餌として与えたところ、高確率で種苗が成育し、実用可能な成果を得られた。高級珍味とされるミネフジツボの養殖普及への可能性が高まり、関係者は「漁業者の所得向上や観光資源につながってほしい」と期待を寄せる。

（金濱千優希）

養殖普及の可能性高まる



種苗生産の拡大が期待されるミネフジツボの種苗。31日、階上町



ミネフジツボは国内最大級の食用フジツボ。甲殻類で、エビやカニのような風味が特長。3年ほどで食べられるサイズに成長する。単価は1キログラムあたり2千円に

もなり、ホタテの10倍ともいわれる。日本酒に合うとあって、仕入れに積極的な飲食店もある。種苗生産に関しては、八戸学院大の鶴見浩一郎特任教授が2009年度から研究している。11年には陸上で生産した種苗を養殖板に

付着させ、食べやすい1個体ずつの形で成長させる技術で特許を取得した。13年からは実用化を目指し、同協会との共同研究をスタート。養殖板は東北総産出量の約1割を占める。ミネフジツボの種苗生産に向けた研究内容について説明する鶴見浩一郎特任教授（右から2人目）ら関係者

31日、階上町

合研究社（八戸市）が開発している。

これまでの研究では生産コストや安定性の面で適した飼料が見つかっていなかった。今回、同協会の松橋聡専門員がハナサキガニの種苗生産に活用されているタラシオシラを与えたところ、6回の試験全てで種苗が養殖板に付着し、成長したという。

鶴見特任教授は、ミネフジツボについて「魅力を知りつつ仕入れられないと話す飲食店は多い。県の名産品にできれば、漁業者の所得向上や観光への寄与につながる」と強調する。

今後、漁業者らの手で市場へ出荷できるようにするには▽養殖での実証実験▽種苗を大量生産する技術の確立▽安価な養殖板の改良が不可欠となる。

特に実証実験は、県内各海域での成育状況の把握や付着物の調査などが急がれる。漁業者がフジツボの養殖を行うための区画漁業権免許は現在、川内町漁協（むつ市）しか保持しておらず、

拡充が必要となる。同協会の二木幸弘業務執行理事は「魚の養殖に比べ管理作業や経営コストが少なく、漁業者の副業になり得る。県には加速度的に実証実験に取り組んでほしい」と熱望。研究10年目にして成果を得た松橋専門員も「養殖が盛んになり、出荷体制が整えば全国へ流通させることが可能。非常に夢のある食材だ」と期待を膨らませる。